

檀風

前

ワキヅレ 本間三郎

トモ 本間從者

ワキ 帥の阿闍梨

子方 梅若

シテ 日野資朝

後

ヲカシ 追手

ワキヅレ 船頭

シテ 不動明王

地は 佐渡

季は 夏

本間詞

「かやうに候ふ者は。佐渡の島の御家人本間の三郎何某にて候。さても此度元弘の乱れに公家うち負け給ひて候。中にも壬生の大納言資朝の卿は。囚人となり此島へ流され給ひて候ふを。某預かり申して候ふ処に。昨日都より飛脚立つて。大事の囚人にて御坐候ふ程に。誅し申せとの御事にて候ふ間。此由を資朝の卿へ申さばやと存じ候。如何に誰か有る。

トモ

「御前に候。

本間

「昨日都より飛脚立つて。資朝の卿を急ぎ誅し申せとの御事にて候ふ間。明日浜の上野にて誅し申すべし。今夜ばかりの事なれば。如何にも番を堅く申し付け候へ。又囚人の由縁に对面は禁制にて有るぞ。其分心得候へ。

トモ

「畏つて候。

ワキ子次第

「親の行くへを尋ね行く。く。越路の旅ぞはるけ

き。

ワキ詞

「是は都今熊野柳の木の方。帥の阿闍梨と申す客僧にて候。又是に渡り候ふ幼き人は。壬生の大納言資朝の卿の御子息。梅若子と申し候。資朝の卿は遠流の身となり給ひ。佐渡の島に御座候ふを。今一度御対面有りたき由仰せられ候ふ間。頼まれ申し都を忍び出で。唯今御供申し。佐渡の島へと急ぎ候。

道行

「名残ある。都の空は遠ざかり。く。末は遥の越の海。今ぞ始めて白真弓。敦賀の津より舟出して。波路遥の旅衣。浦々泊り重なりて。行けば沖にも里見ゆる。佐渡の島にも着きにけり。く。

ワキ詞

「急ぎ候ふ程に。佐渡の島に着きて候。此所にて囚人奉行をば本間とやらん申し候。先々案内を申さうずるにて候。此方へ御入り候へ。如何に案内申し候。

トモ 「誰にて渡り候ふぞ。

ワキ 「囚人奉行本間殿とは此御館にて候ふか。

トモ 「さん候本間殿の館にて候。何の御用にて候ふぞ。

ワキ 「是は都今熊野柳の木の方。帥の阿闍梨と申す山
伏にて候。又是に渡り候ふ幼き人は。壬生の大納

言資朝の卿の御子息。御名をば梅若子と申し候。

父御に今一度御対面ありたきとて。遙々是まで御
下向候。此由本間殿へ御申し有つて。資朝の卿へ

対面させ申されて賜はり候へ。

トモ 「委細承り候。総じて囚人のゆかりなどの御尋ね候
はゞ。申し次ぐまじき由定め置かれ候へども。幼

き御方の遙々都より御下向候ふ程に。某が心得に
てそと本間殿へ申し候ふべし。暫くそれに御待ち
候へ。

ワキ 「心得申し候。

トモ 「如何に申し上ぐべき事の候。

本間詞 「何事ぞ。

トモ 「御門に案内を申し候ふ罷り出で候ふ所に。客僧の
一人十二三ばかりなる幼き人を御供あつて。是は
都今熊野槲の木の方。帥の阿闍梨と申す山伏に
て候ふが。此幼き人は壬生の大納言殿の御子にて
御座候ふが。父御に今一度御対面ありたきとて遙々
是れまで御下向の由申され候ふ程に。総じて囚人
のゆかりなどは堅く御禁制の由申し候へども。ひ

らにそと申し入れてくれよと余りに御歎き候ふ程
に。さて御披露申し候。

本間

「汝が申す如く。囚人のゆかりなどの事は。叶ふま
じきとの大法なれども。幼き人のはるぐ御下り
候ふ事。あまりに痛はしく候ふ間。そと出で、彼
山伏に見参申さうずる由を申し候へ。

トモ

「畏つて候。如何に客僧の御坐候ふか。

ワキ

「承り候。

トモ「仰の通りを申し入れて候へば。幼き御方の遙々御下向候ふ事。あまりに御痛はしく候ふ程に。そと御目にかゝるべき由を仰せられ候。直に委しく御申し候へ。

ワキ「近頃祝着申して候。

本間詞「都よりの客僧は何処に渡り候ふぞ。

ワキ詞「さん候是に候。

本間「これは何の為めの御下向にて候ふぞ。

ワキ「唯今申し入れ候ふ如く。是は都今熊野柳の木の方
に。帥の阿闍梨と申す山伏にて候。又こゝに渡り
候ふ幼き人は。資朝の卿の御子息。御名をば梅若
子と申し候。資朝の卿は流人となり。此島に御坐
候ふ由聞しめし及ばれ。今一度御対面ありたき由
にて愚僧を御頼み候ふ程に。遙々是まで御供申し
て候。然るべきやうに御申し候ひて。引き合はせ
申されて賜はり候へ。

本間

「さては資朝の卿の御子息にて御座候ふか。是まで遙々の御出神妙に存じ候。総じて囚人のゆかりなどに対面は堅く禁制にて候へども。はるぐはる是まで御下向にて候ふ程に。其由資朝の卿へ申し。対面させ申さうずるにて候。暫くそれに御待ち候へ。

ワキ

「心得申し候。さらば是に待ち申し候ふべし。

シテサシ

「籠鳥は雲を恋ひ。帰雁は友を忍ぶ心。それは鳥類にこそ聞きしに。人間に於て我ほど物思ふ者はよ

もあらじ。実にや科なうして配所の月を見る事。

古人の望む所なれども。住みはつまじき世の中に。

明暮物を思はんより。天晴とう斬られ候はゞや。

本間詞

「あら痛はしや何事やらん独言を仰せ候ふよ。如何に申し候。本間が参りて候。

シテ詞

「本間殿と仰せ候ふか此方へ御出で候へ。

本間

「唯今参る事余の儀に非ず。昨日都より飛脚立つて。急ぎ誅し申せとの御事にて候ふ程に。明日浜の上

野に御供申し。御痛はしながら誅し申し候ふべし。
御最後の御用意あらうずるにて候。

シテ「只今も独言に申し候ふ如く。かくてながらへ諸人に面をさらさんより。とく誅せられたきと申し候ふ事。さては叶ひて候ふよ。」

本間「又歎きの中の御悦びの候。都今熊野棚の木の坊に。帥の阿闍梨と申す山伏の。十二三ばかりなる幼き人を伴ひ申され。是は資朝の卿の御子息梅若子に

て御座候ふが。今一度御対面ありたきとて。遙々御下向候。そと御対面候へ。」

シテ「是は思ひもよらぬ事を承り候ふ物かな。日頃事のついでに申しつる如く。某は総じて子を持たぬ者にて候。定めて門たがひにて候ふべし。急いで追つ歸され候へ。」

本間「何と御子は持たれぬと仰せ候ふか。」

シテ「中々の事。」

本間

「さては聊爾なる事を申す者にて候。やがて追つ歸し候ふべしさりながら。都より遙々来りたる心中あまりに不便に候ふ程に。物越にそと御覧候へ。

シテ

「げにく都の者はゆかしく候ふ程に。さらばそと見うずるにて候。

本間

「あれく御覧候へ。

シテ

「さればこそ思ひもよらず。一向に知らぬ者にて候。急いで追つ歸され候へ。

本間

「あら不思議や。御子息にてはなき由仰せられ候ふが。何とて御落涙候ふぞ。

シテ

「御不審尤にて候。彼者の親も我等如きの流人にて候はんか。親の配所を尋ねかね。幼き者の遙々来りたる志。不便に存じ覚え落涙仕りて候。

本間

「さては御子息にては御座なく候ふか。

シテ

「中々の事某が子にてはなく候。急いで追つ歸して賜はり候へ。

本間 「心得申して候。やがて追つ歸し申さうずるにて候。

本間詞 「最前の客僧は何処に渡り候ふぞ。

ワキ詞 「これに候。

本間 「仰せの通りを資朝の卿へ申して候へば。御子息にては御座なき由仰せられ候。何とて聊爾なる事をば承り候ふぞ。

ワキ 「なふ御思案あつても御覧候へ。御子にてもなき人の遙々これまで下り給ふべきか。天晴客僧が申す

通りを資朝の卿へ御申し候はゞ。やはか左様には仰せられ候ふまじ。

本間 「さては資朝の卿へ申さぬと思し召し候ふか。

ワキ 「左様に存じ候。

本間 「言語道断。かゝる口惜しき事を承り候ふ物かな。弓矢八幡氏の神も照覧候へ。懇に申して候へども。資朝の卿に御子息の御座なき上は候。聊爾なる事を承り候ふ物かな。此上は某は一向に存ずまじく

候。

ワキ「なふく暫く。あら笑止や。はや御内へ御入り候ふは如何に。梅若殿是何と仕り候ふべき。

子「悲しやな遙々尋ね来りたる。かひも渚のかたし貝。あはぬ思ひを如何にせん。

シテ「我も恋しく思子を。最期に見たくは思へども。我子と名のらば敵とて。もしや命を失はれんと。思へば他人と言ひつるこそ。中々思ふ心なれ。

子「一世と兼ねたる此世にだに。添ひもはてざる親子の中。

シテ「ましてやいはん後の世の。

二人「契りもさぞな逢ふ事も。泣くや涙にかきくもり。

地「姿みゝえぬ親と子の。へだての雲霞。立ち添ひながらも。実に逢はぬ事ぞ悲しき。

ロンギ地「今日御最期に定まれば。痛はしながら力なく。武士輿に乗せ申し。浜の上野に急ぎけり。

シテ「かねて期したる事なれば。惜しき命にあらねども。さすが最期の道なれば。心すごきけしきかな。

ワキ、子「梅若父の御最期と。聞くより目くれ肝消え。起きつまろびつ泣くく。御輿の跡につきて行く。

地「御輿を早め行く程に。浜の上野も近くなる。

シテ「波路たゞよふ磯千鳥。

ワキ、子「沖の鷗も音をそへて。あはれさや増さるらん。

地「御首の座敷これなりと。輿よりおろし申せば。

シテ「資朝敷皮の。

地「上になほらせ給へば。武士太刀を抜き持ち。御後に立ちまはり。御十念と勧めけり。く。

子詞「あら悲しや我をも連れて御入り候へ。

シテ「如何に客僧。先この幼き者をそなたへ召され候へ。

ワキ「畏つて候。

シテ「如何に本間殿へ申すべき事の候。

本間「何事にて候ふぞ。

シテ「近頃面目もなき申し事にて候へども。誠は某が子にて候。彼者の事はいまだ幼き者の事にて候ふ程に。御心得を以て助けて賜はり候へかし。」

本間「かゝる痛はしき事こそ候はね。我等も始めより左様に見申して候へども。深く御隠し候ふ程に申さず候。御心安く思し召され候へ。梅若殿の御事は。明けなば早船を拵へ。都へ送り付け申し候ふべし。御心安く思し召され候へ。」

シテ「是は誠にて候ふか。」

本間「中々の事。弓矢八幡も御照覧あれ。都へ送り付け申さうずるにて候。」

シテ「あら有難や候。さては此世に思ひ置く事もなく候。はや／＼首を打ち給へと。」

地「西に向ひて手を合はせ。／＼。南無阿弥陀仏と高らかに。称へ給へばあへなく。御首は前に落ちにけり。／＼。」

子詞 「あら悲しや我をも連れて御入り候へ。

ワキ 「言語道断かゝるあへなき事こそ候はね。さりながら御存生の内に御対面候ふ事。返すぐも御本望にて候。

本間 「如何に客僧へ申し候。資朝の卿の御事は。囚人にて御坐候ふ間力なき事にて候。梅若子の御事は御遺言の如く。明日御船を申し付け都へ送り申し候ふべし。今夜は某が館へ御出であつて。御心安く

御休み候へ。

ワキ 「懇に承り有難う候。明日都へ御送り頼み申し候。又御死骸を賜はり供養申したく候。

本間 「中々の事御心静に御供養候へ。我等は私宅に帰り候ふべし。やがて御出あらうずるにて候。

ワキ 「承り候。やがて御館へ参り候ふべし。

本間 「如何に面々聞き候へ。此間の番にさぞくたびれ候ふらん。皆々私宅に帰り休み候へ。某も臥しどに

入つて心静に夜を明かさうずるにてあるぞ。其分
心得候へ。

トモ
「畏つて候。

ワキ詞
「如何に梅若子へ申し候。是は本間殿の館にて候。
今夜は御心静に御休み候へ。明けなば舟を仕立て
送り申すべき由申され候。御心安く思し召され候
へ。

子詞
「如何に申すべき事の候。

ワキ
「何事にて候ふぞ。

子
「本間を討つて賜はり候へ。

ワキ
「あゝ暫く候。かゝる聊爾なる事を承り候ふ物かな。

彼本間と申すは。一旦囚人を預かりたるにてこそ
候へ。御身の親の敵は相模の守高時こそ誠の親の
敵にて御座候へ。それは都へ御上り候ひて。自然
の時節を御待ち候へ。

子
「いや目の前にて父を討ちたるこそ。親の敵にて候

へ討たでは叶ひ候ふまじ。

ワキ「実にく仰せは尤にて候へどもさりながら。此島
国にて人を討つては。さて御命をば何と召され候
ふべき。唯思し召し御止まり候へ。

子「たとひ命は失ふとも討たでは叶ひ候ふまじ。

ワキ「たとひ命は失ふとも討たでは叶ふまじきと仰せ候
ふか。

子「中々の事討つて賜はり候へ。

ワキ「かゝるけなげなる事を仰せ候ふ物かな。此上は討
つて参らせ候ふべし。しかも彼者申し候ふは。内
の者ども。此程の番にくたびれてぞあるらん。先々
私宅に帰れ。其身も臥しどに入つて夜を明かさう
ずる由申し候ひし程に。討つべき夜には日本一の夜
にて候。御本望にて候ふ程に。一の刀をば梅若子
あそばされ候へ。二の刀をば此客僧仕るべし。も
し又彼者たちあひ。討ち損ずる物ならば。人手に

はかゝるまじ。梅若子と刺しちがへ申さうずるにて候。

子「心得申し候。

ワキ「こなたへ御入り候へ。あら笑止や。いまだ火が消えず候ふは如何に。思ひ出だしたる事の候。何の爲めにか夏虫の。身を焦がすべき火を取らんと。

子「明り障子に飛び付きたり。

ワキ詞「是こそ消すべき便りなれと。障子を細目に明けゝ

れば。

子「虫はよろこび内に入り。

ワキ「すは火はばつと消えたるは。

地「灯ともに敵の命。いまこそ消えて失すべけれ。ひそかにねらひより。く。守刀を抜き持つて。本間の三郎が。胸の間に乗りかゝり。三刀まで刺しとほし。椽を飛びおり逃げゝれば。追手は声々に留めよくと追つかくる。

ヲカシ「やるまいぞく。さればこそ京より下りたる山伏

の。帥の阿闍梨とやらん。疎忽を仕出ださうずると存じ候。まづ浦々へ追手を懸け候へ。

船頭詞

「此程風を待ち候ふ所に。日本一の追風が吹き候ふ程に。舟を出ださばやと存じ候。

ワキ詞

「はや拔群に來りて候。又あれに舟の見え候。此舟に便船を乞ひ候ふべし。なふくあれなる舟に便船申さうなふ。

船頭詞

「御覽候へ此舟は。柱を立て帆を引くばかりの船にて候ふ程に。未だ出でぬ舟に仰せ候へ。

ワキ

「陸にて人を討つて跡より追手のかゝる者にて候へば。ひらに乘せて賜はり候へ。

船頭

「いやく左様の科人ならば。猶此舟には叶ひ候ふまじ。

ワキ

「よし科人は此客僧。客僧をば乗せずとも。此兎ひとり乗せて給べ。

船頭

「いや児も法師も知らぬとて。なほ此舟を押して行く。」

ワキ

「其船よせずは悔しき事の有らうずるぞ。」

船頭

「何の悔しく有るべきぞ。舟棹だにも忘るゝは。風に出舟の習ひなり。」

ワキ

「さて此風は。」

船頭

「東風の風。」

ワキ

「向うて西に為さうぞえい。」

船頭

「あら忌まはしや聞かじとて。なほ此舟を押して行く。」

ワキ

「暫しと言へど。」

船頭

「留めもせず。」

ワキ

「暫しと言へど。」

船頭

「音もせず。」

地

「舟は波間に遠ざかれば。追手は跡に近づきたり。」

ワキ詞

「あら笑止や。頼みたる舟は遠ざかる。追手は跡に

近づく。さて御命は何と仕り候ふべき。某急度案じ出だしたる事の候。此年月三熊野の権現へ歩みを運びしも。かやうの爲にてこそ候へ。かたじけなくも三熊野を海上に勧請申し。ならびに不動明王の索にかけて。あの舟をふたゝび祈り寄せ乗せ申さうずるにて候。やあく其舟戻せとこそ。戻さずは明王のさつくにかけて祈り戻さうずるぞ。

船頭

「何此舟を祈り戻さうとや。」

ワキ

「中々の事。」

船頭

「山伏は物の怪などこそ祈れ。舟祈りたる山伏は未だ聞かぬよ。」

ワキ

「いや其船よせずして悔むな男。」

地

「台嶺の雲を凌ぎ。年行の功を積む事一千余箇日。しばく身命を捨て。熊野権現に頼みを掛けば。などか験のなかるべき。一矜羯羅二制多伽。三に俱利迦羅七八大金剛童子東方。」

地「抑我朝に。靈神跡を垂れ給ひ。靈神跡を垂れ給

ひて。威光も神徳も。まぢくなりと申せども。

熊野の権現の。誓ひぞ勝れたまへる。

ロシギ地

「不思議や東の風変り。西吹く風となる事は。如何なる謂なるらん。

シテ

「本宮証誠殿。阿弥陀如来の誓ひにて。西吹く風となし給ひて。舟をとづめ給へり。

地

「さて又西の風も止み。こち吹く風となる事は。

シテ

「新宮薬師如来の。浄瑠璃浄土は東にて。東風吹く風となし給ふ。

地

「さて又飛龍権現は。

シテ

「波路に飛んで影向す。

地

「滝本の千手観音は。

シテ

「二十八部衆の。風変舟を早めたり。

地

「さて飛行夜叉は。

シテ

「不動明王の。

地「さつくの縄を舟につけて。万里の蒼波を片時が程
に。若狭の浦に引き付けて。それより都に歸し給
ふ。実に有難き三熊野の。誓ひの末こそめでたけ
れ。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第三輯』大和田建樹 著